

たこと、綿花耕作が認められなかったことなどが不満の様子であった。だからといって、住民の要望をそのまま受け入れれば、国有林は遅かれ早かれ耕作地に転換されてしまうことは目に見えていた。短期的にはそれによって住民の生活は向上するかもしれないが、長期的にはかえって住民の依拠する森林を荒廃させてしまうことになるのではないか。そうした場合、調査団の専門家としての役割は、住民の理にかなった意見は受け入れる一方で、やはりきちんと調査団としての考え方を繰返し住民に説明し、理解を求めることではないだろうか。

図書紹介

◎熱帯林育成利用技術研究成果報告書（熱帯林再生技術研究組合編，同研究組合刊（TEL03-3552-6184），414 pp. 2002年 4,000円）

本報告書は1991年に設立された熱帯林再生技術研究組合の第Ⅱ期事業（1996年～2001年）の試験研究成果報告書である。業態の違う8社がそれぞれ違う分野の計13小課題を担当して試験研究を実行した。バイオテクノロジー利用や林産物加工以外の研究はインドネシア、マレーシア、ベトナム、タイなどの東南アジア諸国で行われた。

報告書は4つの分野に分類されている。「Ⅰ. 育苗技術の開発」においては、熱帯林の再生に欠かせない種苗の生産の観点から、遺伝子操作やDNA解析による新育種技術の開発、組織培養や挿し木技術を駆使した優良樹種、品種、系統の増殖が試みられている。遺伝子操作やDNAマーカーを用いた新育種技術は、基礎研究の段階であるが、増殖が難しいとされているフタバガキ科樹種の挿し木による実用的な苗木生産技術の開発は顕著な成果である。「Ⅱ. 造林技術の開発」では泥炭湿地、雨林伐採跡地、耕作放棄の瘦悪地において、それぞれの立地に適した増殖一育苗一造林法の開発が体系的に行われている。前2箇所では、造林に適した郷土樹種のスクリーニングも幅広く行われている。「Ⅲ. 社会林業に資する技術の開発」ではセラック樹脂生産に適したアメリカネムノキの栽培方法と林間における葉草、農作物との混植の可能性および果樹や香木と農作物との混植などのアグロフォレストリーシステムの研究が報告されている。「Ⅳ. 林産物利用技術の開発」では早生樹を材料としてのボード製造技術、ゴムノキ材の家具用材への応用技術、セラックの利用技術が報告されている。

各課題の成果報告もさることながら、中課題ごとに、その道の第一人者が、既往の研究、本研究の概要と今後の問題点などを要領よくとりまとめているので、忙しい方はこれを読むだけでも価値がある。さらに、冒頭には、佐々木恵彦技術開発委員会委員長の総説があり、熱帯林の特性を俯瞰するのに最適の内容となっている。このように400頁を越える大部の報告書も、それぞれの立場に応じて、能率的に利用できるように工夫されている。

今後、地球温暖化防止、生物多様性など国際的枠組みの中で求められている研究や事業を実行する団体、個人に有益な書となるであろう。（森 徳典）